

投稿

1993年3月号と2003年3月号

～20年前と10年前の「天文教育」～

松村雅文（編集委員会）

1. はじめに

20年前や10年前は、「天文教育」誌にはどんな記事が掲載されていたのでしょうか。

前回[1]は、20年前の1992年12月号と、10年前の2003年1月号の記事を紹介しました。その原稿の作成時、最初は楽しみながら書いていました。しかし、執筆しているうちに、20年前や10年前の記事とは言え、客観的に紹介することは、実はとても難しいことに気がついてきました。これは、私の力量の限界によるのですが、別の理由としては、物事を客観的に評価するには、20年や10年の時間はまだまだ短い、といったこともあるように思えます。紹介する内容はどうしても私自身の主観が入ってしまい、不十分なものにならざるを得ません。異論反論があれば、どうぞ会誌にご投稿ください。

このような制約つきで恐縮ですが、今回は1993年3月号と2003年3月号を見てみましょう。前回と同様、支部会や観望会等の報告は省略しています。

2. 20年前：1993年3月号

図1は、20年前（1993年3月号）の「天文教育普及研究会回報」（「天文教育」の旧称）（No.11）の表紙です。この号の主な記事は、次のようなものでした。

- (1) 原著論文：身障者用天体観測装置の試作
II 天体望遠鏡の製作（根岸 潔）
- (2) 「天文教育・普及の直面する問題—いま、天文関係者のやるべきこと」のフォーラムとポスター

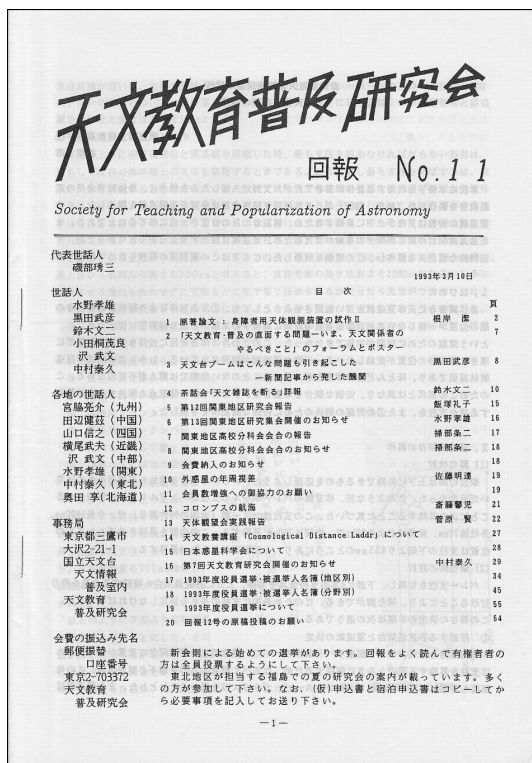


図1 1993年3月号の表紙

- (3) 天文台ブームはこんな問題も引き起こした
—新聞記事から発した展開（黒田武彦）
- (4) 茶話会「天文雑誌を斬る」詳報（鈴木文二）
- (5) 外惑星の年周視差（佐藤明達）
- (6) コロンブスの航海（斎藤馨児）
- (7) 日本惑星科学会について

(1)では、望遠鏡がどの方向を向いても、観測者の目の高さが一定に保てるように、望遠鏡の支柱が上下に昇降できる望遠鏡システムを製作したことについての論文です。車椅子が望遠鏡架台の脚にあたらないように、観測

床を製作したことも合わせて報告されています。車椅子でも観測できるための装置としては、今なら「ワンダーアイ」など、様々な工夫がされていますが、先駆けとなった研究だと思います。

(2)は、第3回目になった天文教育フォーラム(相模原市市民会館での日本天文学会 1993 年春季年会で開催) [4]への問題提起です。最近では、天文の研究者と教育普及の関係者の合同の問題を議論する、というスタンスで行われる場合が多いです。しかし、ここでは、天文研究者に教育普及の意識を持ってもらいたい、という当会側の意図が強く表れていたように思われます。

(3)は、新聞の取材と報道に関し、朝日新聞 1993 年 1 月 19 日の記事の問題を指摘したものです。実は、(3)は伏字が多く、これだけではその内容は明確に判りませんが、ある望遠鏡メーカーについての上述の新聞記事の内容は、正確ではなかったということです。

(4)のタイトルは少し物騒です。この記事は、当時発行されていた三つの天文雑誌(「天文ガイド」、「月刊天文」、「スカイウォッチャー」の各誌¹⁾)の編集者と天文教育普及関係者の意見交換の報告でした。この意見交換会は、各雑誌と天文教育普及の発展のために批判的に意見を交換するという意図だったようです。しかし、タイトルとは正反対に、なんと主催者側が編集者たちに斬られてしまった、という“落ち”から、この記事は始まっています。

(5)は、外惑星の見かけの運動も、恒星の年周視差と同じように解釈できるという指摘です。この話は、この著者も文献を引用しているように、古くから言われているようです。

(6)では、コロンブスが航海をしたとき、どのように経度を決定したのかは、明らかでな

いという問題が指摘されています。

(7)では、1992 年 4 月に設立された日本惑星科学会の紹介のため、同会の研究会のプログラムが掲載されました。

3. 10 年前 : 2003 年 3 月号

次に、10 年前の 2003 年 3 月号(図 2)を見てみましょう。この号は特集が二つもあり、全 107 ページに及んでいます。

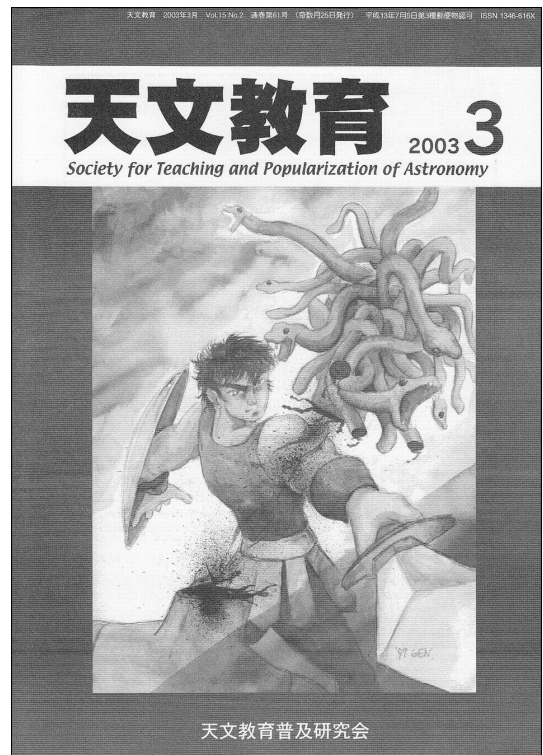


図 2 2003 年 3 月号の表紙

◎特集 1 『すばる』や『ハッブル』を使いこなせ! (関東支部報告から)

(1)すばる望遠鏡の教育・普及利用を目指して (縣 秀彦・篠原秀雄)

(2)「未知の星雲を探せ!—すばるアーカイブは宝の山—」

(木村かおる・志岐成友・川井和彦)

(3)「ようこう」の教育・普及事業の成果

(矢治健太郎)

¹ 「月刊天文」は 2007 年 1 月号から休刊。「スカイウォッチャー」は 2000 年 10 月号から休刊(「星ナビ」が後継)。

- (4) 天文データセンターの紹介 (古荘玲子)
 (5) HST の教育・普及活動 (永井智哉)

この特集は、2002 年 11 月 30 日に行われた関東支部集会の内容についてのものです。すばる望遠鏡という日本が世界に誇る大望遠鏡の成果を、如何に教育や普及に生かすのか、他の観測機器のデータの利用も含めて、論じられています。

◎特集 2

- (6) 詳報：2002 年度ノーベル物理学賞 (福江 純)
 (7) 日本の X 線天文学, その歴史と成果 (小山勝二)
 二つ目の特集は、2003 年 1 月号に引き続き、2002 年のノーベル物理学賞に関する X 線天文学の紹介になっています。X 線は直接目に見えないため、馴染みが薄い感がありますが、2003 年 1 月号の記事と合わせて読むと、世界と日本における X 線天文学の進展の様子がとても良く判ると思います。

◎実践報告

- (8) みんなで人間星座を作ろう
 ー大阪教育大学・スカイクルーの活動ー
 (内野有加・瀬野良子・横尾武夫)
 (9) 小中学生のための天文学習教材(1)
 (長島康雄・渡辺 章)
 (10) 教員・社会人研究者たちによる共同研究
 (大島 修)

(8)は、大阪教育大学の学生ボランティア集団“スカイクルー”のメンバーが、懐中電灯をもって星座の星の配列を再現する、という“人間星座”の紹介です。

(9)は、ブルネオペーパーを用いての太陽黒点の記録方法の紹介です。ブルネオペーパーは、青写真(日光写真)用の教材として今でも使われています。太陽黒点の記録にも使えることは、私自身は初めて認識しました。

2003 年 1 月号にも、食連星の研究の紹介

記事は載っていましたが、(10)では更に詳しく紹介されています。大きな発見がなされたことの報告です。

◎連 載

- (11)「天文学への道」第一回 林 左絵子さん
 (富田晃彦)
 (12)「星と☆形—The Symbol of Stars」第 4 章
 (西村昌能)
 (13) ちょっと気になる天文用語 (小特集)
 (福江 純)
 (14) 読者の声:「ちょっと気になる天文用語」への追加
 (佐藤明達)

天文関係で仕事をするには? という疑問に答える連載の一回目が、(11)の記事でした。

(12)は 2003 年 1 月号の続きで、ペンタグラム(☆の形)が詳説されています。

(13)は、普通に使っている天文用語(星座の名前、太陽系の天体の名前、etc.)の解説です。(14)は、2002 年 11 月号の天文用語の解説記事への追加の解説(投稿記事)です。言葉一つをとっても、奥が深いですね。

文献等

- [1] 松村雅文(2013)「天文教育」2013 年 1 月号 (vol.23 No.1) 50-52
 [2] 「天文教育普及研究会」No.11, 1993 年 3 月号 (vol.5 No.1 に相当)
 [3] 「天文教育」2003 年 3 月号 (vol.15 No.2)
 [4] 天文教育フォーラムのウェブページ
<http://tenkyo.net/forum.html>

松村雅文